

## 4 主語・述語・修飾語テスト3

問四 —— 線が修飾する言葉を選べ。

- ① 寺の建物が観光客の鑑賞に供される末世を予想していたら、同じ天才たちも、やはり別の、しかし、同じようにおどろくべき工夫をしておいてくれたらう。
- ② もともこの封筒は、アメリカから来る郵便物によく用いられていることを知っていたので、カナダでも売っているはずだと思っただ。
- ③ 正木の家で、「めっきり大人になった」ということは、必ずしも彼が全く救いがたい人間になった、ということではなかったのである。
- ④ もしも小学生が意見を発表することを自分で考えることだと錯覚するとすれば、それはある意味でかえって危険であるといわねばならないでしょう。
- ⑤ 私と弟は、自分たちの住まいになっている丸太小屋の外に、しっかりと手をつなぎあって立っていました。丘の方をおおいで、ふるえながら、おおかみの声にじっと耳をかたむけていたのです。
- ⑥ おっかあはさつきから、向こうを向いたまま、たんすの中の大事なものを、せつせとふるしき包みにしまいきこんでいた。いざとなれば、それをかっぴいで逃げ出すつもりなのだ。
- ⑦ 常に仰ぎ見るのでなければ本堂の全貌はながめられない、このことが信仰に及ぼすであろうデリケートな効果を、宗教天才たちは、ちゃんとあらかじめ計算に入れていたに違いない。

二 ① よく、あいつはおれに頭の上からないことがある、と

- 言って、他人の弱点をにぎっていることを、得意になっっている人がいるものだが、人に弱点を見せるということは、その人を信頼していることにほかならぬ。
- ② お母さんの声は怒ったときの声だった。そしていきなり婆やからひったくるようにハちゃんを抱き取って、自分が苦しくつてたまらないような顔しながら、ばたばた手足を動かしているハちゃんをよく見ていらした。
- ③ ちようは花のあるところなら、どんな場所でもいると思っただら、それは、まちがいであった。学校の花だんには、まつばぼたんが、赤・黄・桃色と咲きみだれているし、ほうせんかも白・赤と咲いているのに、少しも飛んでこないからだ。飛んでくるのかもしれないが、見たことがない。
- ④ 赤毛の子猫は、おそろおそろ、ミルクに口を近づけ、鼻先を自分でミルクにつけた。赤毛は、いったん首を引いたが、おそろおそろまた口を近づけていった。波紋が続いているのは、飲んでいこうというしるしだった。
- 「お前もだ」  
尻込みしながらも、赤毛に刺激されてか、ミルクに近づいていく白ぶちに声をかけた。

問五 —— 線が修飾する言葉を二つ選べ。

- ① あの高い山が有名な白山です。
- ② 豆の木は日ごとにぐんぐん成長した。
- ③ 森の奥から、王子が白馬に乗って登場した。
- ④ ぼくは母のやさしい愛をしみじみと感じた。
- ⑤ 王子は大声でおとも者たちの名前を呼んだ。
- ⑥ 南の海に浮かぶこの島は、鳥たちの楽園です。
- ⑦ 近くの森で、小鳥たちがにぎやかにさえずる。
- ⑧ 一日中、遠くの山で、かみなりが鳴りひびく。
- ⑨ 空が暗くなり、やがて雨がぱらぱら降り出した。
- ⑩ 翌日、私は母の姿が見えないのに気づきました。
- ⑪ かもめのジョンナサンはいく度も低空飛行を試した。
- ⑫ 三人の子供は、おそろおそろいちばんはしにあるトロツコをおした。

## 4 主語・述語・修飾語テスト3

問四 解答——線が修飾する言葉を選べ。

- ① 寺の建物が観光客の鑑賞に供される末世を予想していたら、同じ天才たちも、やはり別の、しかし、同じようにおどろくべき工夫をしておいてくれたらどう。
- ② もともこの封筒は、アメリカから来る郵便物によく用いられていることを知っていたので、カナダでも売っているはずだと思った。
- ③ 正木の家で、「めっきり大人になった」ということは、必ずしも彼が全く救いたい人間になった、ということではなかったのである。
- ④ もしも小学生が意見を発表することを自分で考えることだと錯覚するとすれば、それはある意味でかえって危険であるといわねばならないでしょう。
- ⑤ 私と弟は、自分たちの住まいになっている丸太小屋の外に、しっかりと手をつなぎあって立っていました。丘の方をおおいで、ふるえながら、おおかみの声にじっと耳をかたむけていたのです。
- ⑥ おっかあはさつきから、向こうを向いたまま、たんすの中の大事なものを、せつせとふるしき包みに(しまいこんで)いた。いざとなれば、それをかっぴいで逃げ出すつもりなのだ。
- ⑦ 常に仰ぎ見るのでなければ本堂の全貌はながめられない、このことが信仰に及ぼすであろうデリケートな効果を、宗教天才たちは、ちゃんとあらかじめ計算に入れていたに違いない。

① よく、あいつはおれに頭の上がらないことがある、と

- 言って、他人の弱点をにぎっていることを、得意になっっている人がいるものだが、人に弱点を見せるということは、その人を信頼していることにはかならぬ。
- ② お母さんの声は怒ったときの声だった。そしていきなり婆やからひったくるようにハちゃんを抱き取って、自分が苦しくつてたまらないような顔をしながら、ばたばた手足を動かしているハちゃんをよく見ていらした。
- ③ ちょうは花のあるところなら、どんな場所でもいると思っていたら、それは、まちがいであった。学校の花だんには、まつばぼたんが、赤・黄・桃色と咲きみだれて、いるし、ほうせんかも白・赤と咲いているのに、少しも飛んでこないからだ。飛んでくるのかも知れないが、見たことがない。
- ④ 赤毛の子猫は、おそろおそろ、ミルクに口を近づけ、鼻先を自分でミルクにつけた。赤毛は、いったん首を引いたが、おそろおそろまた口を近づけていった。波紋が続いているのは、飲んでいっているというしるしだった。
- 「お前もだ」  
尻込みしながらも、赤毛に刺激されてか、ミルクに近づいていく白ぶちに声をかけた。

問五 解答——線が修飾する言葉をつ二つ選べ。

- ① あの高い山が有名な白山です。
- ② 豆の木は、日ごとにぐんぐん成長した。
- ③ 森の奥から、王子が白馬に乗って登場した。
- ④ ぼくは母のやさしい愛をしみじみと感じた。
- ⑤ 王子は大声でおとも者たちの名前を呼んだ。
- ⑥ 南の海に浮かぶこの島は、鳥たちの楽園です。
- ⑦ 近くの森で、小鳥たちがにぎやかにさえずる。
- ⑧ 一日中、遠くの山で、かみなりが鳴りひびく。
- ⑨ 空が暗くなり、やがて雨がぱらぱら降り出した。
- ⑩ 翌日、私は母の姿が見えないのに気づきました。
- ⑪ かもめのジョナサンはいく度も低空飛行を試した。
- ⑫ 三人の子供は、おそろおそろいちばんはしにあるトロッコをおした。

↓※( )は補助動詞